

子ども会（学習会）だより

MY SKY No. 8

マイ・スカイ

1997年6月10日火曜日発行（毎週火曜日子まぐれ発行）

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責：吉成正士

もういい加減腹立った！許さん！勝負じゃっ！！

何のことかという、いまだに起こっている「靴^{くつ}に対するいたずら」についてです。

これだけ学級^{うった}で訴え、集会で訴え、あの手この手で訴えても、いまだ靴に関するいたずらが続^{ぞくはつ}発しています。確かに「白^{しろ}を基調^{きちょう}とした運動靴^{うんどうぐつ}」という規定^{きてい}が守られてなかったり、必要以上^{ひつよういじょう}に高価^{こうか}な靴^はを履^はいてきているという問題点はあると思います。見つめ直さなければなりません。でも、これが改善^{かいぜん}されればすべてが解決できるのかといえば、そうでもないような気がするのです。

そこで、遅^{おそ}まきながら靴対策^{たいさく}として、靴箱^{ふせん}付近^{かんし}の監視^{きやうか}が強化されることになっています。情^{なさ}けない限りです。でも、盗^とられたりいたずらされている子の気持ちを思えば、当然のことでしょう。微力^{びりよく}ですが、私吉成^{しき}も体育館前^はに張りつき、常に眼を光らせ、絶対^{かくご}にいたずらを許^しさないという姿勢^{せいせい}で臨^{のぞ}んでみます。覚悟^{かくご}しておいてください。

ところで、やってる子は必ずいるわけですが、その子たちはいったい何故^{なげ}やるのでしょうか？日頃の生活からくるストレスを、いじめという形に変えて発散^{はつさん}させているのかもしれない。ストレスだらけの現代生活^{ひがいしや}の被害者^はかもしれません。でも、だからといっていたずらやいじめが許されるわけではありません。もっともっと人間の心を取り戻^{いとな}す営^いみを徹底^{てってい}して、地道^{じみち}にやらなければならないような気がするのです。でないと、もし仮^{かり}に靴に対するいたずらがなくなったとしても、別の形^{はつさん}で発散^{はつさん}され、繰り返されるような気がするのです。

そのためには、私たち大人^{こころがま}の心構えも大切になってくると思われます。子どもがストレス^たを貯^こめ込まないような「遊び、勉強、etc」を、それぞれの生活している地域^{さい}単位^ぎで再考^{こう}する必要があるように思われるのですが……。

まあ、とにかくにも監視^{かんし}したりされたりするのが本来^{ほんらい}の学校の姿とは思えません。本当に一人ひとりが自覚を持って、「今起こっている事」に真剣に当たるべきです。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

☆ 吉成が、今の仕事をしてるわけ

え〜ところてん、じゃなくって、ところで、(おもうないのはわかってます)みなさんは私吉成のことをどれくらい知ってるでしょうか？結構知らない人が多いんじゃないでしょうか？実際、MY SKYと吉成と吉成の顔が一致していない人も多いようで、「え〜、知らなかったー！」と言ってくれる人もたくさんいます。

そこで、少しでも私のことをわかってもらうため、ちょっとだけ自己紹介をしてみようと思います。

本名：吉成正士 よしなりただし 住所：〒770徳島市北田宮四丁目8-22 年齢：(跡)17歳
 生月日：11月17日 星座：蠍座 さそり 血液型：B型 教職年数：10年目(板中では7年目)
 専門教科：数学(現在は2E, 3Eへ行ってる。たまに1A, 1Bも?) 趣味：興味あるものは何でもする
 出身大学：(今はなき)徳島大学教育学部(東小の山崎先生とは同級生)

他にも、私が生まれ、小学校・中学校・高校・浪人・大学と過ごしてきたいろんな出来事を紹介できると、吉成という人間がよくわかってもらえるのではないかと思います。それをしているとときがないので、また合間あいまに紹介していこうと思います。なお、教職に就いてから、特に板中に来てからのことについては、「いしづえ」という本にまとめてあるので、興味ある方は是非とも読んでみてください。これでだいふ私のことはわかると思いますよ。

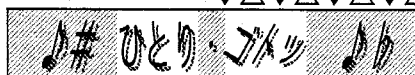
さて、少ない紙面で是非とも知っておいてほしいことが一つだけあります。それは、今の同和教育担当という仕事に就いたときのことです。もうかれこれ2年半くらい前になります。その頃は、今の高2の子たちを学級担任していました。すごくユニークなクラスで、何が飛び出してくるかわからない「ビックリ箱のようなクラス」とよく表現していました。当時は、「このまま3年生に持ち上げられたらな……そしたら、この子らの卒業と共に、自分も板中を心おきなく去れるんやけど……」と思っていました。実は当時私は、定期異動で1年後に板中を去ることになっていたのです。

するとそこへ、同担(同和教育担当)の仕事の話が舞い込んできました。板中の同担は、3年勤めた後、同主(同和教育主事)を3年間、計6年間勤めることになっています。「浮ついた気持ちでなく、腰を据えてかからないとできない仕事だから」ということなのです。私は迷いに迷いました。

「同担をすれば、板中であと6年はいられるし、そのうち教え子たちも先生になって戻っ

今回は、MY SKY第1号の「答辞」にも載っていた「タンポポ」の詩を作った、坂村真民さん^{さかむらしんみん}の自筆^{じひつ}のおはがきです。どうぞ読んでみてください。でも、読めるかな？

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼



先週の金曜日夜、第2回の「部落問題・同和教育」勉強会を郡頭集会所で開きました。前回の二人から、今回はカッキーと私と私のかみさんの三人に増え(?),江島修作先生^{えじましゅうさく}の講演会ビデオ^{かんしやう}を鑑賞しました。なかなか楽しいビデオで、勉強になりました。第三回は今週の金曜日で、やはり7:30から郡頭集会所で行います。活動内容は「町同研(板野町同和教育研究大会)」についてです。先生方も保護者の方も、ふるって参加してください！

火曜日に、各クラスにおいて部落問題意見発表会が行われます。それぞれそのクラスによって手法^{しゅほう}は違っているとと思いますが、来週の校内発表^{ほんしん}に向け、本心を語り合い、それぞれの絆^{きずな}を確かめあうところまで高めてみましょう！

水曜日には、総合センターで6:30から解放子ども会を行いますので、ふるって参加しましょう！

また来週金曜日には、毎年町内で行われている板野町同和教育研究大会の中学校の部が、板野中学校で行われます。意見発表で得た学級の絆を、各クラスの授業でも遺憾なく発揮^{はつき}してみてください。懐かしい小学校の先生もやってきますよ！

★ ☆☆ ★★★ ☆☆☆ ★★★★★ ☆☆ ★

- 6月10日(火) 学級部落問題意見発表会(3・4校時)
- 11日(水) 解放子ども会(18:30~20:00; 総合センター)
- 16日(月) 校内部落問題意見発表会(5・6校時)
- 20日(金) 板野町同和教育研究大会「中学校部会」(5校時; 板野中学校全学級)
- 23日(月) 板野郡部落問題意見発表会



学習会閉講式(倉敷チボリ公園)(98. 3. 12)

和田武広講演会

『二度とない人生だから④』

この告白を受けたとき、私はものすごいショックを受けました。部落差別という現実が目の前に出てきたからです。それまで、

「彼女と結婚できる。うれしいな。早く結婚式を挙げて、新婚旅行どこに行こか」

と思つてたのに、一挙に目の前が真っ暗になりました。

「ああ、この結婚は大変だ。周りから大反対を受けるだろう、どうしよう……。しかし、少なくとも部落差別は

いけないし、あんな不合理なことはない。高校時代も少しだけ習った。大学時代は歴史が好きで、専門

にやつていた。それで、部落差別ができた歴史もよく知っている。非常に不合理で、政治的なからくりで作られ、差別を受ける根拠は全くない

ことだと百もわかつてゐる。だから『差別するような大人にはなりたくない』と思つてたけど、ここで彼女

との結婚を諦めたら自分は差別したことになるし、差別に負けたことになる。どうすりゃいいんだ……」

と悩んだわけです。悩みましたけど、とにかく彼女には、

「わかった。きみの言っている意味はわかった。これはきみの家にも、きみにも全く責任のないことなんだ。

あくまでこちらの、私の家の問題なんだから、帰ってキチツと話すから心配しないでいいよ」

ということ、その日は別れたわけでした。

しかし、帰つてみてもどうしていいやら分からない。その頃の私には、差別を乗り越えるという、キチツとした考えなり力もありませんでした。だから、「駆け落ちしようか……どうしようか」と、逃げるようなことばっかりしか考えてなかったわけです。

しかし、彼女がそこまで思い切つて言ってくれたので、「自分自身としても応えなくつちやいけない！」というところで、両親にこのことを話しました。

「彼女は被差別部落出身であり、相手方のご両親もその事を心配してる。でも、差別なんかいけないことだから、絶対結婚したいし、彼女も好きだ。どうしても結婚したい」

このように言いました。父と母は、大変びっくりしました。びっくりしましたけれど、母はしばらくすると気を取り直して、

「いや、もうそんなこと言つても、あんないい娘さんなんだし、差別云々

なんかいう時代じゃないんやから、父ちゃん許してやろうや」

というようなことを言ってくれました。父もその時はかなりショックを受けて

いましたが、翌日になつて、「このことは相手先には全く責任がないこと、こちらの問題なんだ。娘

さんにも何にも責任ないことだから、二人の結婚は許してやらないかんや

ろ。そしてこのことでもし自分の親戚が大反対して『そんなんだつたら縁切る』と言われても、俺はいい。

だからもう許してやろう。ただ、一つだけ条件がある。姉ちゃんたち二人だけには了解してくれ」

私には二人の姉がおりました。二人とも嫁いで、もう子どももおりました。それぞれ家庭を持つておりました。

「姉ちゃんたちには本当のことを言うておかないかん。三人ともわしの子どもなんだから、いくら長男じゃ言

つても、武広一人のわがままだけ聞いて姉ちゃんたちの意見を無視するわけにはいかん。姉ちゃんたちさえ

了解してくれば、もうわしは何にも言わんよ」

というふうなことを言ってくれたんです。だから頭から猛反対ということじゃございませんでした。

そこで私は、早速姉たち二人を説得

に行つたわけです。そして姉たち、その旦那さんも含めて話しました。みんなびっくりはしておりましたが、

「いや、もういいよ。そんなこという時代でもないし、わしやそんな差別するような人間じゃないから」

ということ、二人の姉とも、その旦那さんとも了解を受けたんです。それで、私は喜んで母に伝えました。母も大変喜んでくれました。

「ああ良かった良かった。姉ちゃんたちもわかつてくれたか」

ということ、自分のことのように大変喜んでくれたんです。

ところが、それから二、三日もしないうちに事態が急展開を始めました。

母から電話があり、もう今にも泣きそうな声で、

「武広、悪いけどもうあのことは諦めてくれんじやろうか。母ちゃん的一生のお願いや。本当に頼むから諦めてくれ。一度はええ言うたけど……」

というように、泣きそうな声で電話がかかってきました。どうしたんやと言いますと、

「実は、姉ちゃんたちが一度はいいと言いながら、一晩寝て考えてみたら

気が変わったと……。その時はいいと言うとつたんやけど……」